【研究紹介】イギリスと日本の動物園来園者はどう動物福祉を考えているのか？：
動物との向き合い方の共通点と違いを探る国際比較研究

2025 年 4 月に PLOS ONE に掲載された本研究では、京都市動物園と日本モンキーセンター、イギリスのエディンバラ動物園において、来園者の「動物福祉」に関する意識調査が実施されました。日英両国から 1,600 名以上の回答が得られ、動物の幸せや生きた餌の給餌に対する考え方、動物園や飼育員・行政への信頼感など、多角的に比較しました。

■ 背景と目的

「動物福祉（アニマルウェルフェア）」とは、動物の心身の状態を指す言葉で、科学的に評価する対象です。飼育・管理状況によっても変化するものですが、文化や環境によって具体的な方策は多様です。イギリスでは、長年動物福祉に配慮した飼育管理については法制度に組み込まれてきたのに対し、日本では「動物愛護（あいご）」の文化が根強く、人間の感情に基づいた保護意識が中心となってきました。動物福祉への適切な配慮のためには、思い込みではなく、人々が実際にどのように考えているかを正しく理解することが大切です。今回、動物園来園者を対象として、このような文化的な違いが、いつ・どのように現れるのかを調査・分析することが本研究の目的です。

■ 調査概要

- **調査対象**：
  - イギリス：エディンバラ動物園（RZSS）
  - 日本：京都市動物園、日本モンキーセンター
- **調査期間**：2021 年～2022 年の指定日程に現地で実施
- **対象年齢**：6 歳以上（子ども向けと大人向けの質問紙を用意）
- **回答者数**：合計 1,611 人（イギリス：616 人、日本：995 人）
- **用語について：**動物福祉と幸せは同じ概念ではありませんが、日本では「動物福祉」という言葉が知られていないため、近い言葉でかつ両国で同じ意味を持つと考えられる「幸せ」という言葉を用いて調査を行いました。

■ 主な研究結果

1. 動物福祉への関心は高いが、その捉え方に違い

- 両国ともに動物の「幸せ」への関心は高いことがわかりました。
- 動物園動物の幸せにどのような要素が重要と考えるかについては、共通性と違いがみられました。両国ともに、「自然な環境」「野生に近い環境」といった概念を重要視することや、「食べ物」「広さ」といった基本的ニーズについては同じように多く記述されました。ただし、英国では「環境刺激」や「ポジティブな感情」など動物

の心理的・環境的な豊かさについての記述が多かった一方で、日本では「食事」や「ストレスの軽減」など基本的ニーズが中心でした。こうした違いは比較的幼い年齢からみられました。

2. 生きた餌の給餌**に対する許容度**
   - 英国では「タコ」の生き餌に対する拒否感が強い点が異なりました。
   - しかし、両国ともに、若い年齢で拒否感が強くなる傾向や、昆虫や魚類の給餌は許容されやすく、ウサギなど哺乳類では否定的な意見が多くなるなど一般的な傾向は類似していました。
   - 日本では「好き嫌い」や「かわいそう」といった人間の感情を重視する理由が多く挙げられたのに対し、英国では「認知能力」や「行動の複雑さ」など、動物側の特性に基づいた判断が見られました。
3. **動物福祉に対する「信頼」の文化的違い**
   - 日本・英国共に、政府・動物園・飼育員の順番で信頼が高くなる傾向。
   - 英国では政府・動物園・飼育員への信頼が全体的に高く、評価が分かれる傾向。
   - 日本では「わからない」「考えたことがない」といった曖昧な回答が多く、積極的に判断しない傾向もあり、日本・英国での違いははっきりしませんでした。

■ 意義と今後の展望

この研究は、日本とイギリスにおいて動物福祉に関わる考え方の共通点と違いを示した比較研究です。特に教育の場としての動物園の役割や、子どもの頃からの価値観形成が重要であることが示唆されています。今後、文化に応じた情報発信や教育プログラムの工夫が、よりよい動物福祉の実現につながることが期待されます。

📄 論文全文はこちら（英語）：

PLOS ONE - DOI: 10.1371/journal.pone.0320241